

## 129. 甲賀郡信楽町五位ノ木 前期窯の採集遺物について

わが国の六古窯に数えられる信楽は、その独特の色調・形態によって、古来茶陶を中心に、珍重され、多くの遺物が伝世されている。ところが六古窯のうち、常滑・越前など他の五窯が、戦後における発掘調査、分布調査の進展によって、その実態が解明され、型式編年もすすんでいるのに対し、信楽については、昭和42年に実施された名古屋大学による宮町中井出窯の発掘調査を唯一例として、他に若干の確認調査が実施されただけで、分布調査も一部を除いて未着手の状態におかれていた。このため、信楽については、これまで多くの論著が公表されているにもかかわらず、その実

態について、不分明な点が、きわめて多くあったのである。そして一方においては、信楽町内における種々の開発も徐々にすすみ、従来周知されていなかった重要な遺構が、未調査のまま壊滅するといった事態を生起するにいたった。このような状態にかんがみ、地元信楽町教育委員会では、昭和55年度～57年度の3ヶ年を要して、古窯跡を中心とする町内遺跡分布調査を実施したのである。その成果の一部は、「信楽町内遺跡分布図」として公刊されたが、調査によって採集された膨大な遺物については、未着手のままにおかれている。そこで今回、それらの中から、信楽の成立について一つの示唆を与えるものとして、北新田五位ノ木前期窯の遺物を紹介し、責任の一端を果すことにしたい。

### 1

五位ノ木窯跡は、甲賀郡信楽町大字神山字五位ノ木に所在する古窯跡群である。本遺跡は、信楽町の西南

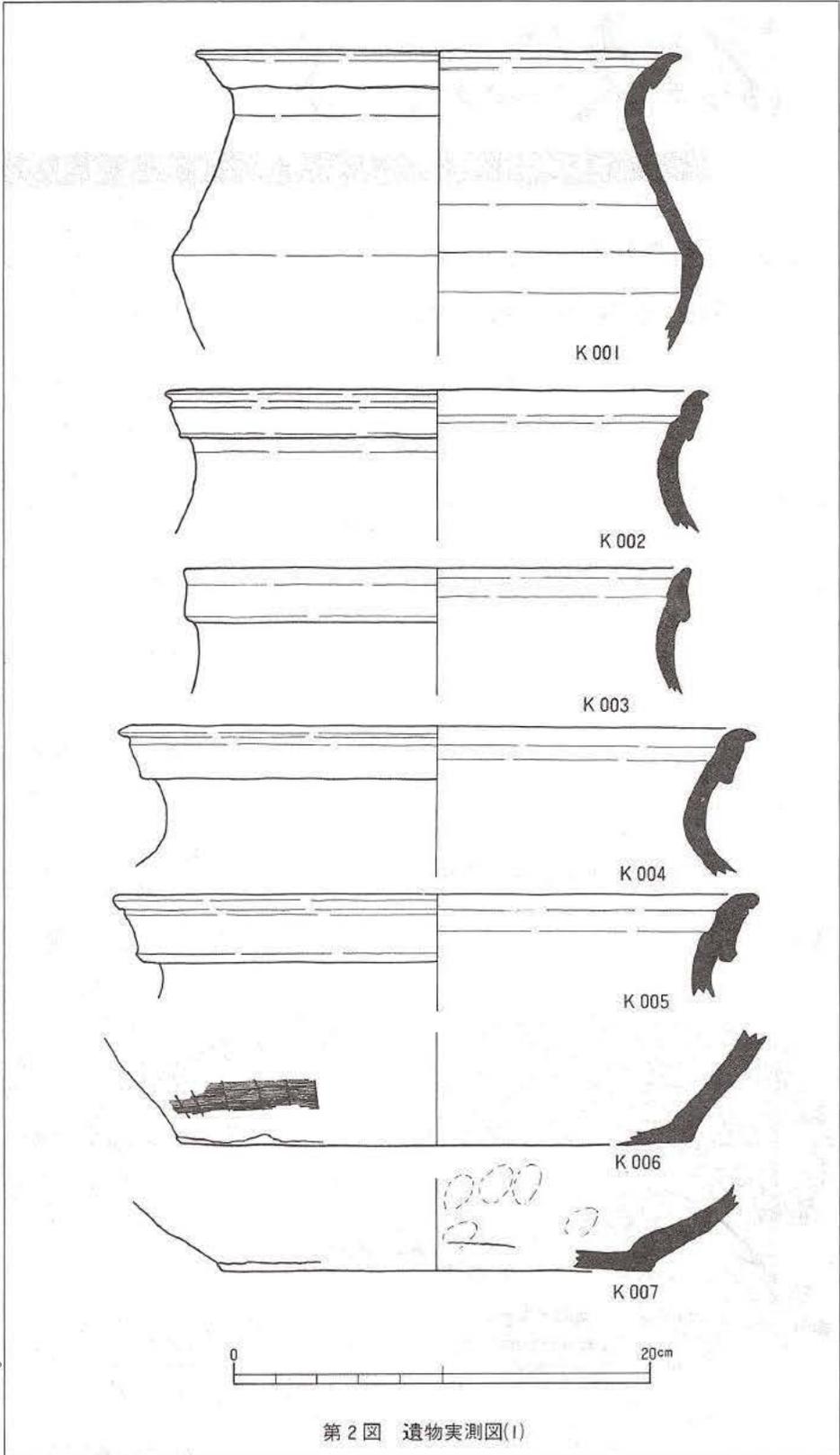


第1図 位置図

▲中世窯 ■近世窯 (『やきもの集成』より)

部、三重県阿山町に接する三郷山西南麓一帯に位置しており、現在は信楽町の地籍に含まれるものの、元禄13(1700)年の三郷山山論の決着までは、伊賀領であったと言われ、伊賀の古窯跡とする見解もみられる。しかしながら、信楽と伊賀は、上述のとおり、地理的に隣接しており、それぞれが茶陶としての個性を獲得する近世以前においては、形態や胎土によって区別できないのが実情であり、一応本遺跡も信楽として考えることにしたい。

本遺跡の窯跡群は、三郷山の西南麓、信楽町神山から阿山町横山に通ずる県道の北側の斜面に階段状に分布している。大きく分けて4段に類別され、桃山時代とみられる一群は下段に、室町時代とみられる一群は中段から上段にみられる。かつては山麓一帯に陶片が散布していたと言われるが、今日では、ほとんどみられず、窯の数も正確には判明しない。ほぼ一段に4~5基の窯跡が推測されるので、全体と



第2図 遺物実測図(1)

しては20基内外とみられる。

窯の形態については、不明とせざるを得ないが、室町時代の一群は、立地などからみて、斜面に構築された、地下式の竈窯とみられるが、桃山時代の一群については、昭和11年に現地を訪れた藤岡一氏が、竈窯より一歩すすんだ「半地下式窯」と推定されており、同時期とみられる中井出古窯で検出された、半地下式の双胴式竈窯である可能性も考えられよう。

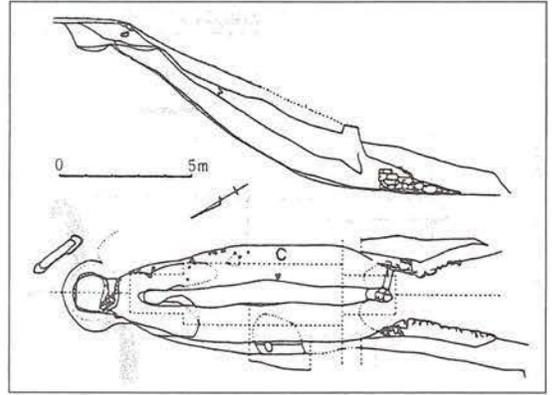
## 2

本遺跡の遺物は、いずれも採集遺物であり、その量も多くはないが、ここでは、そのうち上段に分布する五位ノ木前期窯において採集した主要なものを図示し、若干の解説を加えておきたい。なお採集された遺物は甕・壺・摺鉢の三種のみで、他の器種は全く含んでいない。

**甕 (K001~K007)** 甕は、いずれも口径23~32cmをはかる大型品で、口縁部はやや退化した「N字状」の断面を呈し、頸部で大きく屈曲、体部は全形を伺えるものは少ないが、「算盤状」に鋭く内湾するものとみられる。広く安定した平底で、大きく内湾して体部にのびている。形態的には、南北朝から室町時代初期の常滑の甕にきわめて類似しており、系譜的なつながりが推定される。

**壺 (K008~K011)** 壺は、直立する頸部に、端部を玉縁状に外反した口縁部がつくという、シンプルな形態で、体部は球状に丸く張り出すとみられる。K008は口径27.5cmをはかり、甕の可能性もあるが、他はいずれも口径13~15cmをはかる。底部は安定した平底で、体部に向け斜方向に直線的にのびる。

**摺鉢 (K012~K018)** 摺鉢は、口径26~32cmをはかり、口縁部は、やや内湾し、さらに大きく外反、端部を丸くおさめる。体部はほぼ直線的にのび、底部は



第3図 中井出1号窯実測図(橋崎彰一氏製作)

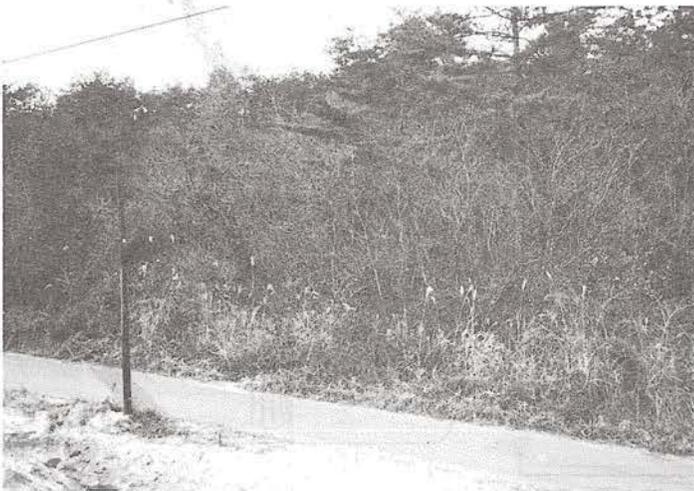
安定した平底を呈する。内面には、櫛描きの条痕を等間隔に施しているが、一部を除いて、一筋のものが大半であり、この種のものとしては、古い様相を示すものと言えよう。

以上、五位ノ木前期窯の採集遺物の概要を述べた。これらの遺物は、いずれも、三郷山の陶土を使用したもので、灰白色の微石粒を含んだ明るい色調の良好な胎土で、黄緑色ないし赤褐色を呈している。そして、これらの遺物の所属する年代は、型式編年がすすんでいない現状では、明確にしがたいが、上述のとおり、常滑との形態の類似から、南北朝から室町時代初期にかけての時期が、一応想定されよう。そして、このことは、伝甲賀郡中世墓出土とされる「応安己酉」(1369年)の紀年銘をもつ小型甕が、本遺跡の甕に近い形態を示すことから裏付けることができるであろう。

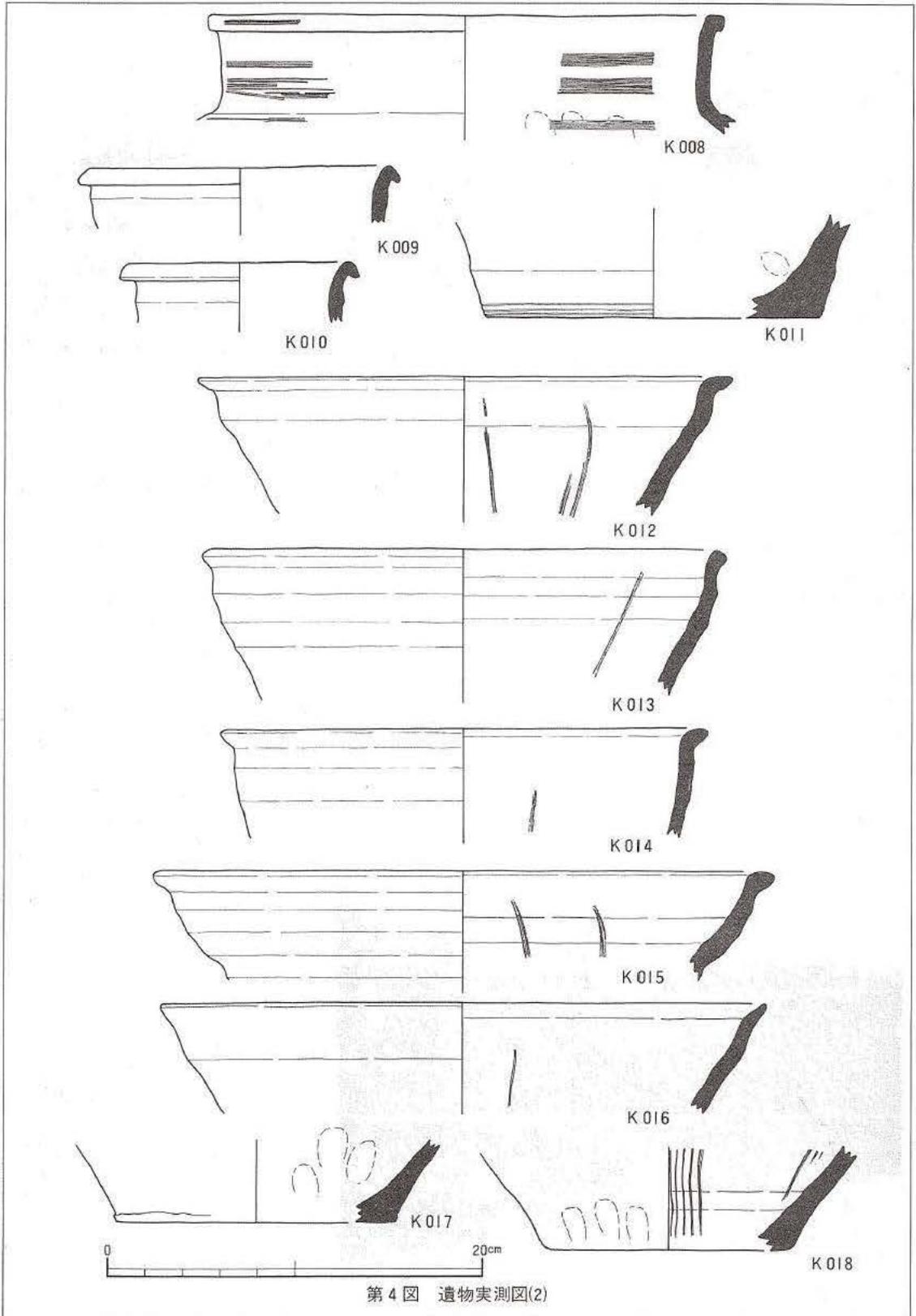
周知のように常滑は、南北朝ごろから西日本を中心に、従来の社寺だけでなく、一般庶民層にまで販路を広げ、大量生産をすすめており、本窯もかかる常滑の外縁拡大の波の一つとして、その影響下に成立したことが推定されるであろう。(大橋信弥)

### 参考文献

- 満岡忠成『信楽・伊賀』  
(陶磁大系8 平凡社)
- 沢田由治『常滑・越前』  
(陶磁大系7 平凡社)
- 河原正彦『信楽』  
(日本陶磁全集12 中央公論社)
- 赤羽一郎・小野田勝一『常滑・渥美』  
(日本陶磁全集8 中央公論社)
- 橋崎彰一『日本の陶磁・古代中世篇』  
(中央公論社)
- 河原正彦『信楽と伊賀』  
(日本の美術 No.169 至文堂)



遺跡遠景



第4図 遺物実測図(2)